講演 7　高熱患者に対し、エキス剤

加賀屋病院
三谷　和男　先生

はじめに

近年、インフルエンザ治療には抗ウイルス剤が使用されるようになりつつあるが、その使用にあたっては種々の制約がある。このような場合でも漢方薬を有効にいかすことで治療が可能である。そこで、今回重篤と思われた高熱患者に、大青龍湯を用いて有用であった症例を報告する。

･･･● 大青龍湯について ●･･･

大青龍湯はエキス製剤としては市販されていないので、われわれは麻黄湯エキス合越婢加朮湯エキスを用いている。ただし麻黄の量が11ｇと多目であるのに対し、石膏が8ｇとやや少な目であることに注意して、症例を選択する必要がある。また、桂枝湯エキス合麻杏甘石湯エキスの場合は、芍薬が配合されていること、麻黄が4ｇと少ないことに注意する必要がある(**表1**)。

大青龍湯は「傷寒論」の条文で、「不汗出而煩躁者(汗出でずして煩躁する者)」と記載されているが、「汗出でず」と「無汗」との鑑別が重要である。つまり「汗出でず」は、皮膚が汗を出したいにもかかわらず、汗が出ない状態であり、結果として煩躁する。これに対して「無汗」は単に汗が出ないだけで煩躁は起こらない(**表2**)。

■麻黄湯エキス　合　越婢加朮湯エキス

麻黄11ｇ、桂枝４ｇ、甘草２ｇ、杏仁５ｇ
大棗３ｇ、生姜1ｇ、石膏８ｇ、朮４ｇ

■桂枝湯エキス　合　麻杏甘石湯エキス

麻黄４ｇ、桂枝４ｇ、甘草２ｇ、杏仁４ｇ
大棗４ｇ、生姜1.5ｇ、石膏10ｇ
芍薬４ｇ

表1　エキス剤による大青龍湯

症例 1　56歳　男性　悪寒、発熱、全身倦怠感

１月22日頃より鼻汁、咳嗽、全身倦怠感が出現し、このようなしんどさは経験したことがないという。38.6℃の発熱があり、受診することもできず、1日中臥床していた。翌日も症状は変わらず、食欲も低下。38℃台の熱が続き、咳嗽も非常にひどくなった。24日に至っても症状が治まらないため、ヘルパーの介助で受診となった。

栄養状態はやや不良、顔色はやや赤く、上気した印象で、ひとたび咳が出るとなかなか止まらない。やや軟便で、尿の出が少し悪いという。

脈状は整・浮。舌質は紅色、舌苔は厚く黄白膩苔、腹力は中等度でやや膨隆しており、腹直筋の緊張はなく胸脇苦満を認める。臍傍部の圧痛等は認めない。胸部Ｘ線で右下肺野に軽度の炎症像を認め、迅速診断でインフルエンザ抗体はＡ型陽性であった。

一般的にインフルエンザは、太陽・少陽の併病と考え、柴葛解肌湯(エキス剤では葛根湯エキス合小柴胡湯加桔梗石膏エキス)を処方することが多いが、本症例は未だ太陽病期にあると考えた。さらに、舌の所見が黄白膩苔であり、裏熱の存在も示唆されたので、石膏の配剤が必要と考え大青龍湯を選択した。3日間の服薬で経過は良好、脈状は弦、舌苔も軽減したため、柴胡桂枝湯に変方した。

症例 2　25歳　女性　悪寒、発熱、四肢脱力感

1月24日、勤務中に悪寒を自覚、熱は39℃であった。3日前より何となく体がだるく、微熱もあったという。汗が全く出ないことが治りの悪い一因と考えた。

による大青龍湯を投与した症例

シンポジウム

■太陽中風、脈浮緊、発熱悪寒、身疼痛、不汗出而煩躁者、大青龍湯主之。若脉微弱、汗出、悪風者、不可服。服之、則厥逆、筋惕肉瞤。此為逆也。

■太陽の中風、脉浮緊、発熱悪寒、身疼痛、汗出でずして煩躁する者は、大青龍湯之を主る。若し脉微弱、汗出で悪風する者は、之を服すべからず。之を服すれば則ち厥逆し、筋惕肉瞤す。此逆と為す也。

■麻黄六兩去節、桂枝二兩去皮、甘草二兩炙、杏仁四十個去皮尖、生姜三兩切、大棗十枚擘、石膏鶏子大砕。綿裏、右七味、以水九升、先煮麻黄、減二升、去上沫、内諸薬、煮取三升、去滓、温服一升、取微似汗。汗出多者、温粉粉之。一服汗者、停後服。若復服、汗多亡陽、逐虚、悪風、煩躁、不得眠也。

■構成生薬：麻黄、桂枝、甘草、杏仁、生姜、大棗、石膏

表2　大青龍湯(傷寒論)の条文

脈状は浮・緩。舌質は紅、黄白色の膩苔が全面を覆う。腹力は中等度で腹直筋を触知し、心窩部の抵抗(心下支結)を認めた。

胸部X線では特記すべき所見なく、迅速診断ではインフルエンザ抗体は陰性であった。本症例は、まず太陽・少陽の併病かとも考えたが、脈は浮であることから太陽病期と考えた。さらに、汗が出ないため煩躁している病状と考え、石膏が配剤された大青龍湯を選択した。2日間の服薬で症状は軽快。その後、柴胡桂枝湯に変方した。

・・・・ 調理について ・・・・

本症例のような症状の激しい疾患に漢方薬を使用し、急性期治療が有効であった後の微熱や軽度の頭痛などを完全に取り去るための処置法を「調理」と呼ぶ。たとえば、症例1では、大青龍湯を3日間服薬することで経過は非常に安定したが、その後、「脈状は弦、舌苔も軽減」したため柴胡桂枝湯に変方している。

つまり、大青龍湯によって邪を去った後、ウイルスによる身体的ダメージを強く受けた生体を速やかに回復させるため、柴胡桂枝湯あるいは補中益気湯を後の処置として処方することも漢方治療のポイントである。

まとめ

インフルエンザをはじめとする高熱の患者に対し、抗ウイルス剤が投与できない場合にも、大青龍湯(麻黄湯合越婢加朮湯)は有効な薬方と考える。

ディスカッション Discussion

寺澤　私自身もインフルエンザであれば葛根湯ではなく、大青龍湯か麻黄湯を使用しますが、もう一度大青龍湯を処方する際のポイントをまとめていただけますか。

三谷　一番のポイントは、脈が浮で、太陽病期と判断できることです。太陽病期であれば、汗を出させて治療するという発想ですが、桂枝・麻黄のみではいささか難しく、石膏を併用する必要があるということです。「不汗出而煩躁者」という所見が明確な場合は迷わず大青龍湯と考えます。

寺澤　脈が浮いて、しかも力強い。それから体の中に熱がこもって汗をかきたいのにかけないというイライラ感がある。こういうことをポイントと考えてよいでしょうね。
ところで、大青龍湯はエキス剤としてはいまのところ保険薬価に収載されていませんので、合方の必要性があります。麻黄湯合越婢加朮湯では麻黄の量が多くなるので、虚血性の心疾患があるような方には注意が必要で、そのときには桂枝湯合麻杏甘石湯の方がよいでしょう。